

北部日本における古代文化と農耕

阿部 義平

-
- | | |
|----------------|--------------|
| 1 序めに | 4 本州島北端の弥生文化 |
| 2 北部日本の古代文化の枠組 | 5 小結 |
| 3 縄文文化・弥生文化と農耕 | |
-

論文要旨

日本列島には、縄文文化（約12000～2300年前）が展開した。近年の研究では、狩猟採集の生業だけでなく、ソバやヒエや雑穀類の栽培も広く認められてきている。日本独自ともいわれてきた縄文文化が、新石器時代文化の一つとしての発展をした状況が解明されつつある。そこで、日本列島に展開した次の時代の弥生文化との関係が再検討課題となる。弥生文化は、水田稲作や雑穀を栽培する本格的農耕文化というだけでなく、鉄や青銅も用いる金石併用時代文化であり、中国や朝鮮と密接な交流をもって開花した文化である。倭人や倭国に統合されるまでの歴史もみられた。東日本の弥生文化は、東北地方南部まで在地の縄文文化の伝統が色濃くみられる一方で、稲作や金石併用期の要素が変容しつつも伝わる。更に北の本州島北端では、紀元前3～2世紀の西日本の初期弥生文化の遠賀川式土器オンガと伴う諸要素を受容しながら、金属器や弥生文化系の石器をほとんど欠いた水田稲作が展開した。この文化は縄文時代晩期にこの地で発展していた亀ヶ岡文化の基盤の上に、弥生式土器と同じレベルの土器構成を実現し、一定の農耕文化を形成した。その成果は、より北方にも可能な範囲で伝えられている。北方では漁撈文化の発達や少数例の金属器も知られている。縄文文化から確実な変化がみられ、倭人達の統合に向う本来の弥生文化とは異なる文化領域を形成する出発点となっている。一方ではこの地域文化は続縄文文化とも呼ばれるが、金石併用状況がしだいに進行し、南方の農耕文化との交易や交流活動が生業にも組みこまれているものとみられる。弥生時代に併行するこの時代の状況は、次の古墳時代にも、古墳文化に隣接する広域な北大文化として、鉄器時代文化の様相を示しながら発展していく。古代史にみえるエミシの登場を示すものである。本論は、エミシ文化に至るまでの北部日本の歴史と文化の展望の内、弥生時代併行期までを主に概括したものである。